

PeptiDream

PEPTIDREAM INC.
REVOLUTIONIZING DRUG DISCOVERY

株主通信

2016年7月1日 ●●● 2017年6月30日

ペプチドリーム株式会社

証券コード 4587



代表取締役会長

窪田 規一

代表取締役社長

リード・パトリック

新たな布陣で特殊ペプチド医薬品の市場創造を推進

2017年に入り、当社にとって2つの大きなイベントがありました。1つ目は、神奈川県「川崎市殿町国際戦略拠点(キング スカイフロント)」内に新本社・研究所を建設し、7月から稼働を開始したことです。旧本社の東京大学駒場リサーチキャンパスでは研究スペースが限られており、これが事業拡大の制約となっていました。新本社・研究所の完成により研究スペースが大幅に拡大したことから研究開発部の人材の積極採用を進めており、スピード感をもって事業拡大に臨んでいく考えです。

2つ目は、塩野義製薬株式会社、積水化学工業株式会社と当社の3社合併で特殊ペプチド原薬の合成・製法の研

究開発、製造及び販売を行う特殊ペプチドCMO「ペプチスター株式会社」を9月1日に設立したことです。当社は2016年8月に「成長戦略 第3章」入りを発表しました。目標は「特殊ペプチド医薬品を医薬品の主流にする」ことです。そのためには、特殊ペプチドの安定した大量生産体制を構築することが不可欠となります。当社独自の創薬プラットフォーム：PDPSを用いた創薬共同研究開発契約の提携企業は17社(国内製薬企業6社、海外製薬企業11社)となり、今後も拡大が予想されます。当社が特殊ペプチド医薬品の市場創造を目指す以上、提携先企業が安心して研究開発を進めることができるようなインフラを準備するこ

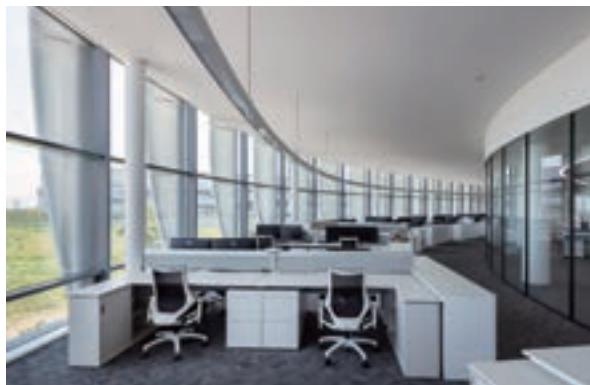
とが当社の責務だといえます。

そこで当社の創業者で当社の立ち上げから安定した黒字体制の構築を成し遂げた代表取締役会長である窪田規一が、ペプチスター株式会社の代表取締役社長として経営にあたることになりました。

当社は、2017年9月27日に新体制の人事を取締役会で決議しました。窪田は同日付で当社の代表取締役会長に就任し、当社の経営全般の推進・監督、後進の育成に注力します。後任の代表取締役社長には、常務取締役(研究開発部担当)リード・パトリックが就任しました。パトリックは、入社以来、研究者としての豊富な知見を活かして当社の研究開発部をリードし、海外のビジネス案件も取り仕切ってきました。新社長の就任により、新本社・研究所の設立により得られる充実した研究開発リソースを存分に活用して、当社の先端技術を一層拡大発展させつつ、テクノロジーオリエンテッドな当社事業を強力に推進していくことが期待されます。

新しく代表取締役社長となりましたパトリックのコメントです。「2006年7月3日に当社は設立されました。最初の10年間は基礎作りでした。技術を確立し、国内外の製薬企業とPDPSを用いた契約を行い、評判を高めることです。これはうまくいきました。世界でペプチドリームの評判は高くなっています。次の10年間に当社が行うことは、実際に薬を出すことです。病気で苦しんでいる世界中の人々に薬を届けることが、代表取締役社長となった私がすべきことと考えています」。

当社は新たな布陣で特殊ペプチド医薬品の市場創造を推進してまいります。



神奈川県川崎市殿町の新本社(全景)・研究所内

PDPSによるブレークスルー

当社は、特殊ペプチド医薬に特化した事業を展開しております。

「特殊ペプチド」とは、生体内タンパク質を構成する20種類のL体のアミノ酸だけではなく、特殊アミノ酸と呼ばれるD体のアミノ酸やNメチルアミノ酸等を含んだ特殊なペプチドをいいます。当社では、この特殊ペプチドから医薬品候補物質を創製することを主たる事業としています。

現在の創薬は、「低分子医薬品」及び「抗体医薬品」がその中心になっていますが、これまでも「ペプチド医薬品」は存在していました。しかしながら、ペプチドを医薬品にするにはいくつか致命的な問題点がありました。すなわち、これまでの技術では、ペプチドの弱点である「生体内での半減期が短い(生体内安定性が悪い)」、「細胞膜を透過できない(透過しにくい)」、「スクリーニングするのに必要な多様性を持ったライブラリーがない」といった問題点をクリアすることができず、そのためペプチドが医薬品候補物質の中心的な物質になることはありませんでした。

これに対して、当社は、従来のペプチドが持つ弱点を右記の3つの独自技術により解決し、特殊ペプチドを医薬品候補物質とすることに成功しました。

PDPS (Peptide Discovery Platform System)

当社ではこれら3つの独自技術について体系的な特許ポートフォリオを構築することで、創薬開発プラットフォームシステム「PDPS (Peptide Discovery Platform System)」を創りあげました。

PDPSにより、当社は特殊ペプチドの医薬品候補物質としての価値を飛躍的に高め、世界的な大手製薬会社とコラボレーションしながら、日々医薬品の研究開発を進めています。

PDPS

1 フレキシザイム技術

特殊ペプチドを創製する

フレキシザイム技術により、今まで無細胞翻訳系により組み込むことが困難であった特殊なアミノ酸を簡単に、そして迅速にペプチド合成の中に組み込むことができるようになりました。

2 FITシステム

ライブラリー化する

FITシステムにより、フレキシザイム技術で創製できるようになった特殊ペプチドを段違いの多様性(数や種類)を持ったライブラリーとして構築することができるようになりました。

3 RAPIDディスプレイシステム

高速スクリーニングする

RAPIDディスプレイシステムにより、数千億から兆単位の数の特殊ペプチドを効率的かつ高速、正確にスクリーニングすることができるようになりました。

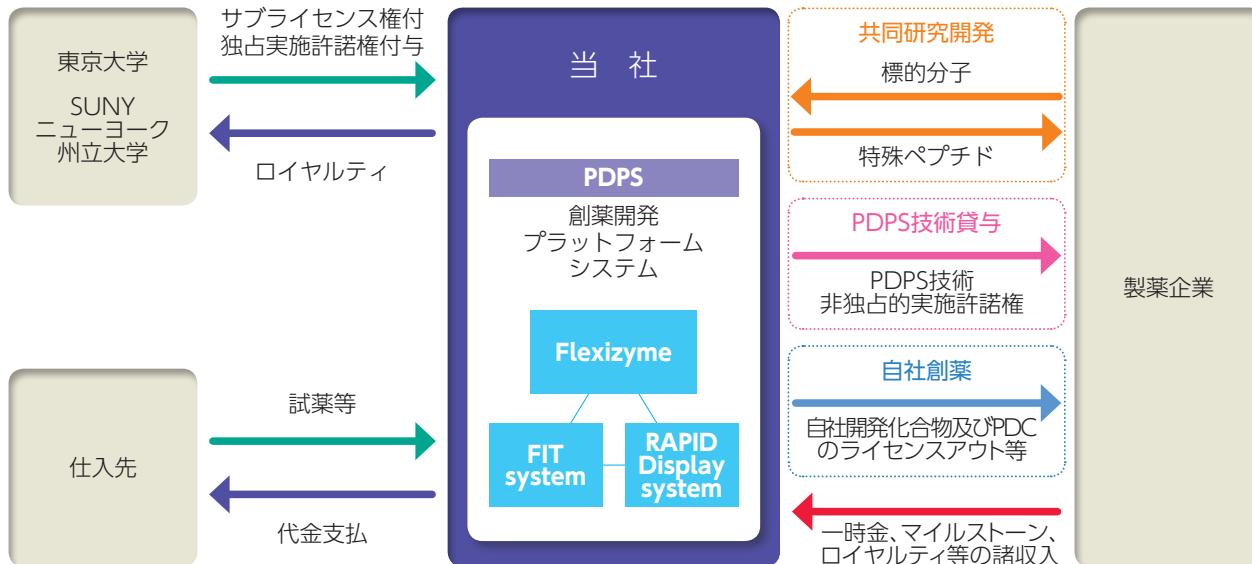
ビジネスモデル

Business Model

事業内容

当社は、当社独自の創薬開発プラットフォームシステムであるPDPS (Peptide Discovery Platform System) を活用して、国内外の製薬企業との共同研究開発のもと、新しい医薬品候補物質の研究開発を行っています。

■ 事業系統図



アライアンス・パートナー



※ロシュ社はジェネンテック社の完全親会社であり、連名契約会社です。

用語解説 PDG (ペプチド薬物複合体)

PDGとは、特定の細胞・組織に対して結合能力及び選択性の高い「特殊ペプチド」と、特定の細胞・組織に届けたい「薬物」を化学的に結合させた複合体をいいます。この特殊ペプチドが薬物を届けたい細胞・組織に選択的に届けるというアプローチは、治療薬開発の重要な未来の形となり、健康な細胞・組織への影響や副作用を最小限に抑えたうえで、治療が必要な細胞・組織に選択的に薬物を届けることが可能となり、薬物の治療効果を最大化できます。



代表取締役会長 窪田 規一

Q 2017年6月期を振り返り、事業の進展と業績についてお聞かせください。

売上高を順調に伸ばし、経常利益・当期純利益の連続増益を維持。「マニフェスト」は一部項目で未達となりました。

当期は、創薬開発プラットフォームシステム：PDPSのライセンス許諾の技術移行(セカンドペイメント)達成および新規契約獲得について目標件数を超え、進行中の創薬共同研究開発プロジェクトからのマイルストーン受領においても順調な実績を上げることができました。結果として業績は、売上高48億95百万円(前期比13.1%増)、営業利益24億90百万円(同2.3%減)、経常利益26億24百万円(同10.6%増)、当期純利益18億90百万円(同19.6%増)と堅調に推移しました。

一方「マニフェスト」として掲げた目標の達成度としては、特に臨床試験の進展について意思決定が当社から顧客企業側に移ったことで、見込みに対する未達が生じました。

業績概要

(単位：百万円)



また、当期は神奈川県「川崎市殿町国際戦略拠点(キング スカイフロント)」内に新本社・研究所を建設し、人員拡充も進めたことなどから費用が増加しました。これらにより利益の伸びが一時的に低下しましたが、今後は創薬共同研究開発プロジェクトの後期移行とともに成果報酬が増加し、利益率も再度上昇していく見通しです。

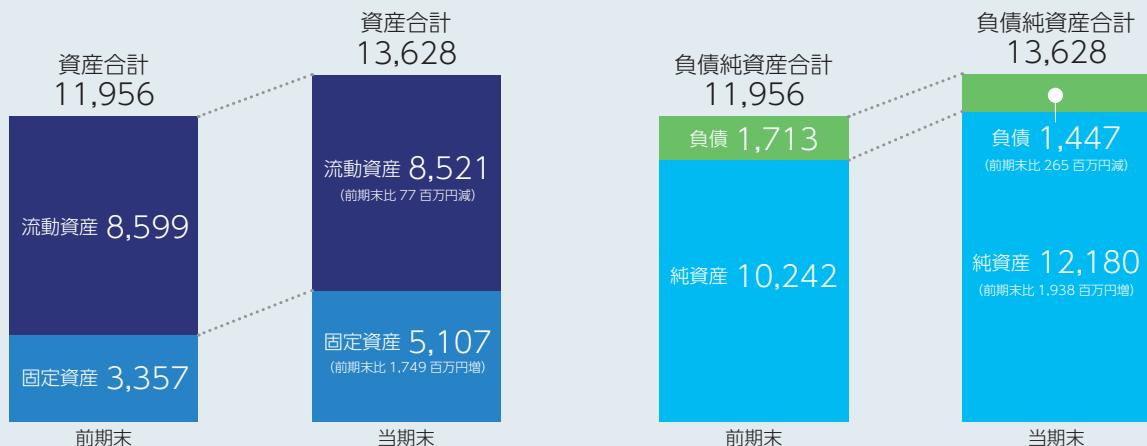
「マニフェスト」の状況を振り返ると、当期は目標として、創薬共同研究開発の新規契約3件の獲得、PDPSライセンス許諾の技術移行達成および新規契約獲得各1件、臨床開発候補化合物1件の認定、臨床試験フェーズIおよびフェーズII各1件の開始、PDC(ペプチド薬物複合体)新規プロジェクト契約2件の獲得を掲げました。これに対して、PDPSの技術移行達成・新規契約獲得は各2件と過達し、臨床開発候補化合物1件の認定も果たしましたが、共同研究開発の新規契約とPDC新規プロジェクト契約は各1件の獲得にとどまりました。臨床試験については、フェーズI・フェーズIIとも期中の開始に至りませんでした。

なお、当社は自社創薬プロジェクトとして、抗インフルエンザウイルス特殊ペプチドの前臨床試験を進めているほか、低分子治療薬およびPDC開発案件を有しています。今後はこれらのパイプラインも、顧客企業との共同研究開発プロジェクト契約に組み込まれるなど、新たなコラボレーション形態として進展する可能性を示しています。



財務状況

(単位：百万円)



Q 特殊ペプチド原薬CMOの設立に関する解説をお願いします。

開発パートナーが求める原薬供給を国内で果たすべく、世界初の特殊ペプチド原薬CMOを合併設立しました。

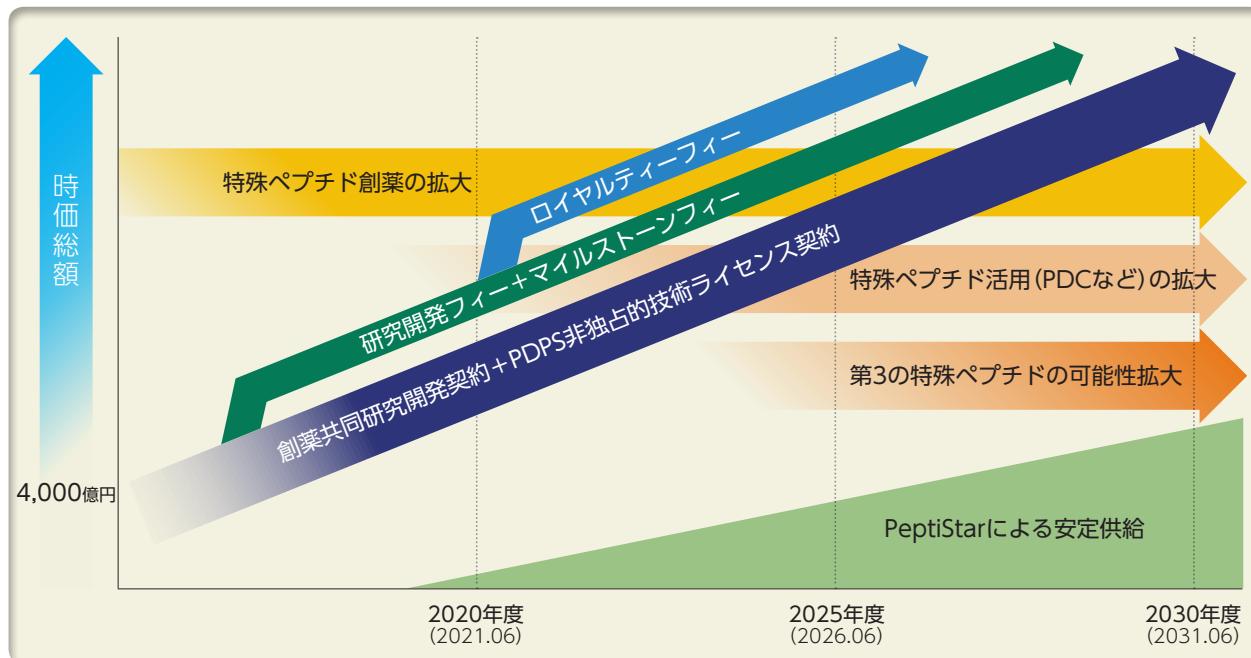
これまで当社は、創薬共同研究開発プロジェクトのパートナーである製薬企業に対し、研究用途の特殊ペプチドに関しては当社が製造を行ってききましたが、その本格的な製造については、製薬企業側に委ねていました。しかし、現状においては高品質な特殊ペプチド原薬を低コストで安定供給できるCMO(医薬品製造受託機関)が世界的にも存在しな

いことから、そのニーズに応じて特殊ペプチド医薬品市場の拡大に貢献すべく、塩野義製薬株式会社ならびに積水化学工業株式会社との3社合併による新会社、ペプチスター株式会社を2017年9月1日付で設立しました。

ペプチスターは、特殊ペプチド原薬の研究開発・製造販売会社として、非臨床試験に必要なGLP準拠、臨床試験および承認後に必要なGMP準拠の製造体制を確立した工場を大阪府摂津市に建設し、2019年7月から9月の稼働開始を目指します。

3社合併のスキームとして、設立時の資本金1.5億円については各社が3分の1ずつ出資を行い、順次増資・融資を実施していく中で、当社は20%未満の出資比率(15億から19

■ 今後のペプチドリームの実現をイメージする



億円程度)を予定しています。ペプチスターの経営は、当社がCMO事業のコーディネートとハンドリングを主に担い、特殊ペプチドの合成ノウハウを提供しつつ、技術開発と技術融合のリーダーシップをとっていきます。塩野義製薬は、薬事法やGMP及びその他法令に則った医薬品製造に関する知見を提供するとともに、革新的ペプチド医薬品を創製し特殊ペプチドの価値を世界的に証明する役割も担っています。積水化学工業は、生産性の高いペプチド合成技術を独自開発しており、これをペプチスターの中でさらに発展させることで、製造面において貢献していきます。

また合併3社に加え、化学メーカー・商社など国内企業9社の協力を得て、CMO事業のオールジャパン体制を築いており、特殊ペプチドの製造技術を国外に拡散させることなく世界をリードしていく考えです。

特殊ペプチド原薬の市場規模については、仮定ですが全世界で5兆円規模と見ており、ペプチスターはこのうち8割の4兆円をターゲットと捉えています。まずは工場稼働の初年度ないし次年度における黒字化を果たすべく、一貫体制の構築を着実に進めていきます。

Q 現在の競争環境と2018年6月期の展望についてはいかがですか？

新本社・研究所の稼働により、これまで以上の成果創出が可能。売上・利益の過去最高更新を見込んでいます。

当事業を取り巻く環境については、現在のところ特殊ペプチドを用いた医薬品開発に関する競合技術・競合企業等が存在せず、引き続き独占的な優位性を認識しています。がん遺伝子療法や再生医療など他の先進的な医療技術と比較しても、不特定多数の患者に対する実地医療におい



ては、特殊ペプチド創薬がもたらす可能性にアドバンテージがあり、医療ブレイクスルーの最先端に位置するものと自負しています。

2018年6月期は、7月に川崎市殿町の新本社・研究所が完成し、人員増強とともに研究開発のキャパシティを大幅に拡充したことから、これまで以上の成果創出が期待でき、多くのプロジェクトの進展が見込める状況です。また、低分子治療薬やPDC開発案件におけるポテンシャルも含め、特殊ペプチドの活用の枠が大きく広がっており、新たな成長機会につながっていくことが期待できます。

これらを踏まえ、2018年6月期の業績については、売上高70億円以上、営業利益29億円以上、経常利益31億円以上、当期純利益21億円以上を予想しています。当社は従来、業績予想数値を開示せず、成果達成の目標を「マニフェスト」として掲げていましたが、先に述べました通り意思決定が当社から顧客企業側に移り、臨床開発候補化合物の認可や臨床試験の開始など、当社でコントロールできない要素が増えていることから、「マニフェスト」に代えて当社がボトムと考える数字を業績予想として発表することにしました。



Q 中期目標の設定と成長戦略の進捗状況をご説明願います。

特殊ペプチド創薬市場の創造を目指す「成長戦略 第3章」は、ペプチスターの設立により大きく前進しました。

当社は、中期的な事業成長を展望し、5年後における成果達成の項目・件数を中期目標として継続的に設定・開示しています。今回あらためて開示内容を精査し、2022年6月期までの中期目標を下記の通り設定しました。

- | | |
|--------------------------|-------|
| ① 新薬の上市(承認・販売) | 1件以上 |
| ② 創薬共同研究開発契約企業数 | 25社以上 |
| ③ PDPSの非独占的技術ライセンス許諾先企業数 | 8社以上 |
| ④ 臨床試験開始プロジェクト数 | 10件以上 |
| ⑤ 2022年6月期 期末人員数 | 120人 |

また成長戦略については、継続的に黒字を計上できる事業基盤を確立した「成長戦略 第1章」、特殊ペプチドの活用による当社独自の創薬基盤を構築した「第2章」を経て、2017年6月期から特殊ペプチドによる新しい創薬市場の創造を目指す「第3章」に移行しました。

「成長戦略 第3章」は、特殊ペプチド医薬品を医薬品の主流にする取り組みであり、その実現のカギとなる世界初の特殊

ペプチド原薬CMO「ペプチスター」の設立により、大きく前進しました。2年後の原薬生産の本格稼働をもって、「第3章」は完結に至ると考えています。その後の成長戦略は、特殊ペプチドが持つ多様な機能を活かした、例えば生体内データベースの構築など、新たな領域への拡がりを目指す事業成長がテーマになるでしょう。

Q 株主の皆様へのメッセージをお願いします。

「病気で苦しんでいる世界中の人々に『ありがとう』と言ってもらえる仕事」を新たなスローガンに掲げてまいります。

当社は、第11回定時株主総会ならびに取締役会によりご承認いただき、私を代表取締役会長とし、前常務取締役のリード・パトリックを代表取締役社長とする新経営体制を発足しました。入社以来、研究開発業務を牽引してきたパトリック新社長のもと、これからの当社は技術力のポテンシャルをさらに高めながら、常にイノベーションを起し続け、新たな価値創出にチャレンジしていきます。私は、それを会長としてサポートしつつ、関係会社となるペプチスターの代表取締役社長を兼任し、グループとしての事業規模を拡大すべく、全力で取り組んでまいります。

当社創業時のスローガン「たった一人の人でも良い。病気で苦しんでいる方に『ありがとう』と言ってもらえる仕事をしたい。」は、特殊ペプチド創薬の着実な進展により、「病気で苦しんでいる世界中の人々に『ありがとう』と言ってもらえる仕事をしたい。」へと変わりつつあります。

株主の皆様には、当社事業の将来にご期待いただき、ともに夢の実現を共有する「ペプチドリーマー」として、引き続き長期のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

会社概要／株式の状況

CORPORATE PROFILE / STOCK INFORMATION

会社の概要 (2017年8月31日現在)

設立	2006年7月
資本金	3,901,491,250円
事業内容	創薬研究開発業
本社	〒210-0821 神奈川県川崎市川崎区殿町3-25-23 TEL 044-270-1300

主要取引先 田辺三菱製薬(株)、第一三共(株)、帝人ファーマ(株)、杏林製薬(株)、塩野義製薬(株)、旭化成ファーマ(株)、米 Bristol-Myers Squibb、米 Eli Lilly、米 Merck、米 Genentech、米 AMGEN、米 Janssen、英 AstraZeneca、英 GlaxoSmithKline、スイス Novartis、仏 IPSEN、仏 SANOFI

役員の状況 (2017年9月27日現在)

代表取締役会長 窪田 規一
日産自動車(株)、(株)スペシャルレファレンスラボトリー(現(株)エスアールエル)、(株)JGS代表取締役社長、当社設立、代表取締役社長を経て、現任

代表取締役社長 リード・パトリック
NRSA 研究員、国立大学法人東京大学先端科学技術研究センター特任助教授、同大学国際産学共同研究センター客員助教授及び特任助教授、当社常務取締役研究開発部担当を経て、現任

取締役(経営管理部長) 関根 喜之
安田生命保険(相)(現明治安田生命保険(相))、(株)トレジャー・ファクトリー総務部長を経て、現任

取締役(研究開発部長) 舩屋 圭一
三菱化学(株)(現田辺三菱製薬(株))、Novartis International AG, Head of PPI Drug Discovery and Novartis Leading Scientist を経て、現任

社外取締役 菅 裕明
State University of New York, University at Buffalo Associate Professor、国立大学法人東京大学先端科学技術研究センター教授を経て、同大学大学院理学系研究科教授(現任)、当社社外取締役(現任)

社外取締役(監査等委員) 笹岡 三千雄
大塚化学(株)探索研究所所長、同社常務執行役員を経て、現任

社外取締役(監査等委員) 長江 敏男
塩野義製薬(株)、アベンティスファーマ(株)(現サノフィ(株)) 執行役員、ヨーク・ファーマ(株)代表取締役社長を経て、現任

社外取締役(監査等委員) 花房 幸範
青山監査法人を経て、アカウンティングワークス(株)設立代表取締役、アークランドサービス(株)取締役(監査等委員)(現任)、当社社外取締役(現任)

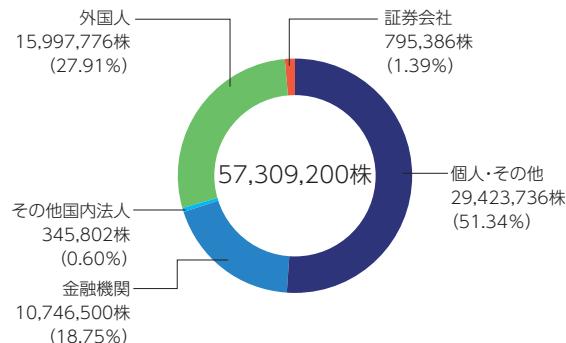
株式の状況 (2017年6月30日現在)

発行可能株式総数	171,200,000株
発行済株式総数	57,309,200株
株主数	16,682名

大株主の状況 (上位10名)

株主名	持株数(千株)	持株比率(%)
窪田 規一	5,993	10.46
菅 裕明	4,612	8.05
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	3,876	6.76
村上 裕	3,842	6.70
リード・パトリック	2,600	4.54
ノーザントラストカンパニー(エイブイエフシー)アカウントノントリーティー	2,239	3.91
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	2,012	3.51
内田 栄太郎	1,300	2.27
資産管理サービス信託銀行株式会社(証券投資信託口)	1,258	2.20
ステート ストリート ロンドン ケア オブ ステート ストリート バンク アンド トラスト, ポストン	1,254	2.19

所有者別株式分布



株主メモ

事業年度	7月1日から翌年6月30日まで
定時株主総会	毎事業年度末日の翌日から3か月以内
株主確定基準日	定時株主総会 6月30日 期末配当を行う場合 6月30日 中間配当を行う場合 12月31日
1単元の株式数	100株
株主名簿管理人	三井住友信託銀行株式会社 東京都千代田区丸の内1丁目4番1号 取次所：三井住友信託銀行株式会社 全国各支店
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告としております。ただし、事故その他やむを得ない事由により電子公告をすることができないときは、日本経済新聞に掲載して行います。当社の公告掲載 URL は次のとおりであります。 http://www.peptidream.com/

ホームページのご案内



<http://www.peptidream.com/>



ペプチドリーム

検索

ペプチドリーム株式会社

〒 210-0821 神奈川県川崎市川崎区殿町 3-25-23
TEL 044-270-1300

<http://www.peptidream.com/>

UD FONT



見やすく読みまちがえにくいユニバーサル
デザインフォントを採用しています。

環境に配慮した植物油インキ
を使用しています。